



岐阜県新発見考古速報 2023

—令和5年度岐阜県発掘調査報告会 発表資料—



高山市 県史跡 松倉城跡本丸の石垣

日時 令和5年10月21日(土) 13:15～15:45

会場 岐阜県図書館 1階 多目的ホール

主催 岐阜県文化財保護センター

共催 岐阜県図書館

日程

12:45～13:15	受付		
13:15～13:20	開会挨拶	岐阜県文化財保護センター所長	
13:20～14:00	事例発表Ⅰ	高山市：上切寺尾古墳群 <small>かみざりてら お こふんぐん</small>	
		岐阜県文化財保護センター	三島 誠
14:05～14:45	事例発表Ⅱ	高山市：県史跡 松倉城跡 <small>けん し せき まつくらじょうあと</small>	
		高山市教育委員会事務局文化財課	押井 正行 氏
14:45～15:00	休憩・遺物見学		
15:00～15:40	事例発表Ⅲ	下呂：湯ヶ峰山頂遺跡 <small>ゆ が みねさんちょう い せき</small>	
		南山大学人文学部人類文化学科	上峯 篤史 氏
15:40～15:45	事務連絡		

資料目次

上切寺尾古墳群の調査	・・・・・・・・・・・・・・・・	1
県史跡 「松倉城跡」の発掘調査について	・・・・・・・・・・・・・・・・	5
事例発表Ⅲ 湯ヶ峰山頂遺跡	・・・・・・・・・・・・・・・・	9
令和4年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査実施一覧	・・・・・・・・・・・・・・・・	13

清流の国ぎふ憲章

～ 豊かな森と清き水 世界に誇れる我が清流の国 ～

「清流の国ぎふ」に生きる私たちは、

知 清流がもたらした自然、歴史、伝統、文化、技を知り学びます

創 ふるさとの宝ものを磨き活かし、新たな創造と発信に努めます

伝 清流の恵みを新たな世代へと守り伝えます

平成26年1月31日 「清流の国ぎふ」づくり推進県民会議

上切寺尾古墳群の調査

岐阜県文化財保護センター

1 はじめに

当遺跡は、高山市上切町に所在し、高山盆地北西部の三枝山から南に延びる丘陵の尾根及び傾斜地に立地します。当遺跡の眼下には、川上川と高曾洞川が流れ、この2つの川に挟まれた場所には、川上川の曲流によって形成された段丘面が広がります。遺跡周辺には、丘陵地や川上川の氾濫の影響の少ない緩傾斜地を中心に遺跡が分布します（図1）。

当遺跡は、平成7年度に高山市教育委員会が刊行した遺跡地図には「上切寺尾古墳群」として6基、「寺尾古墳群」として12基搭載されていましたが、平成27年度に調査に先立って、高山市教育委員会によって遺跡名を「上切寺尾古墳群」に統一するとともに、遺跡の範囲を変更する手続きが行われました。また、同年度に岐阜県文化財保護センターは高山市教育委員会とともに、発掘調査前に作成した現況地形測量図をもとに、現地にて周知の古墳18基の照合を行いました（図2）。図2の照合結果をみると、ほとんどの墳丘は地形測量図の等高線に表れているため、発掘区外の北西や南東に見られる丘陵の尾根上や傾斜地にみられる地形の起伏も、墳丘による高まりである可能性が高いといえます。

今回の発掘調査は、中部縦貫自動車道高山清見道路事業に先立ち、平成27・28年度に合計8,250㎡を対象に実施しました。調査の結果、以前から知られていた18基（うち2基は発掘区外）の他、35基を新たに確認することができました。また、発掘調査で見つかった遺物から、古墳時代後期の古墳と考えられていた当遺跡が弥生時代後期から古墳時代初頭に造営された遺構群であることが分かりました。今回の調査で検出した遺構群は、尾根上に構築された北陸地方にみられる方形周溝墓と同様な遺構群と考えられますが、傾斜地に構築され、三方又は四方を掘削した排土を利用して墳丘を構築する状況など、周溝よりも墳丘が主体となる方形台状墓に近い特性をもつ遺構と考えられることから、遺構の種別を「墳墓」と呼称し、その成果について説明します。なお、上切寺尾古墳群のすべての墳丘を調査できていないため、遺跡名は「上切寺尾墳墓群」ではなく「上切寺尾古墳群」としています。

2 調査の成果

（1）墳墓の規模・形状について

今回の調査では、周溝を伴う方形若しくは不定形の平面形をもつ墳墓を51基確認しました。大半の墳墓は、方台部の直軸長が短軸長の1.5倍以下であり、長軸と短軸の長さに大差がない形態をもちます。方台部の規模は、長軸が10m前後のものと3.6m～8.5mのもの2つのグループに分けられます。方台部の形状は、方形（長方形）の平面形を基調としますが、不定な形状をとるものもあります。周溝の形態は、尾根上の墳墓は方台部を全周するもの、丘陵南側の傾斜地の墳墓は傾斜地の下方側の周溝が認められないものというように、立地により分かれます。傾斜地に造営された墳墓は、方台部を全周する周溝を設置した場合、傾斜地の下方側の周溝の立ち上がりがなくなった可能性が考えられます。

（2）墳丘の構築方法と主体部について

主体部を構築する前の墳丘盛土の構築方法は、低い墳丘や構築方法を判別できなかったものを除くと、大きく2種類に分けることができます。1つは、図3のSZ13のように方台部の周縁に周堤状に盛

土したのち、その内部を充填するもので、周溝掘削によって生じた排土を方台部内の周縁に置き、最後に周堤状の盛土内を整地した工程を示している可能性があります。丘陵南側の傾斜地に立地する墳墓は、図3のSZ41のように方台部の傾斜地の下方側のみ周堤状の盛土したのち、傾斜地上方を充填するものがあり、主体部を設置する面をほぼ水平にし、盛土の崩壊を防ぐ役割があったと考えられます。この構築方法は、方台部の規模が大きい長軸10m前後の墳墓の7基中6基に採用されています。

もう1つの構築方法は、墳丘の中央から順に盛土するもので、尾根上に立地する墳墓にのみ採用されています。比較的平坦な尾根上であれば、この工法でも構築できたと考えられます。

主体部は、一つの墳墓に対し1基が殆どで2基あるものはSZ04・SZ28のみです。また、主体部の長軸方位は、墳墓の長軸方位と直行・並行するものが多い傾向にあります。

(3) 出土遺物について

墳丘及び周溝で遺物が出土した墳墓は、51基中18基あります。主な出土土器を図4に示しました。出土状況は、SZ13で周溝の底面から若干浮いた状態で有段口縁壺(1)と高坏(2)、SZ16で主体部上面から有段口縁鉢(3)・高坏(4)、SZ24で周溝の底面付近から鉢・甕(5)・器台(6)、SZ29では周溝内から高坏(7)・器台(8)、SZ38では主体部埋土内から蓋(9)と周溝の底面付近から台付装飾壺(10)が出土しています。SZ38の蓋と台付装飾壺は、口径からセット関係にある可能性が高いと考えられます。

出土土器の時期は、SZ16・SZ29の土器が弥生時代後期後半、SZ13・SZ24・SZ38の土器が弥生時代末から古墳時代初め頃のものと考えられます。なお、副葬品と考えられる遺物はSZ38主体部埋土の篩い作業で確認した管玉1点のみです。

(4) 墳墓の変遷について

今回の調査により、墳墓の重複関係からみると、墳墓の変遷は方形周溝墓の導入→尾根上に連続する造墓と継続→丘陵南の傾斜地への展開といった動きがあったと考えられます(図5)。

方形周溝墓が導入された時期の墳墓は、SZ17・SZ25～SZ27・SZ45・SZ47の6基(図5下図の灰色で示した墳墓)と思われます。この6基は、周溝を共有しながら連綿と築く墓域の概念が薄い状態で弥生時代後期後半以前に導入されたと考えられます。続いて造営されたのは、尾根上に周溝を共有しながら並ぶSZ12・SZ14～SZ16と思われます。4基の中でも最も新しいSZ16で法仏式期の土器が出土しており、この一群は弥生時代後期後半以前に位置付けられます。この中で最も古いSZ12の所属時期は不明ですが、SZ16の構築後にSZ17・SZ26・SZ27を避けた上でさらに東側の尾根上に連続して構築された可能性があります。また、SZ29より傾斜地の下方にある墳墓は、傾斜を意識した向きで方向が揃っており、基本的には傾斜地の上方から下方へ造墓が進んだと思われます。

3 まとめ

飛騨地域(高山市・飛騨市・下呂市・白川村を含む範囲)では、当遺跡の他に高山市中切上野1号古墳・同5号古墳・ツルネ遺跡、飛騨市中野大洞平遺跡・上町遺跡などで当遺跡とほぼ同時期の方形周溝墓が確認されています。当遺跡の発掘調査では多くの墳墓で墳丘盛土を確認することができ、周溝で掘削した排土などを盛って墳丘が構築されていることが分かりました。また、出土土器(図4)から弥生時代後期後半の墳墓と考えられるSZ16・SZ29は飛騨地域における最古の墳墓であり、後続する時期の墓制の在り方を考える上でも貴重な事例と言えます。



図1 上切寺尾古墳群と周辺の遺跡
 (「平成4年高山市市街図其1」をもとに作成)



図2 上切寺尾古墳群調査前地形測量図

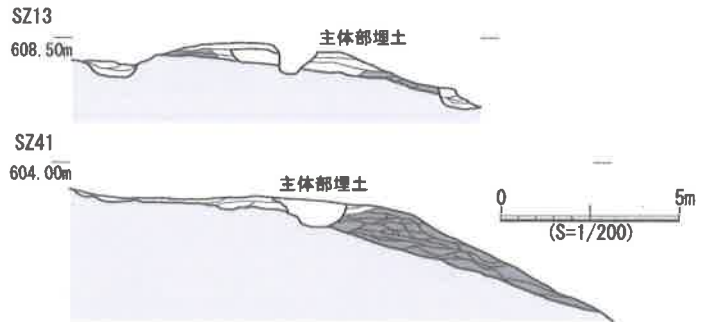


図3 墳丘の盛土

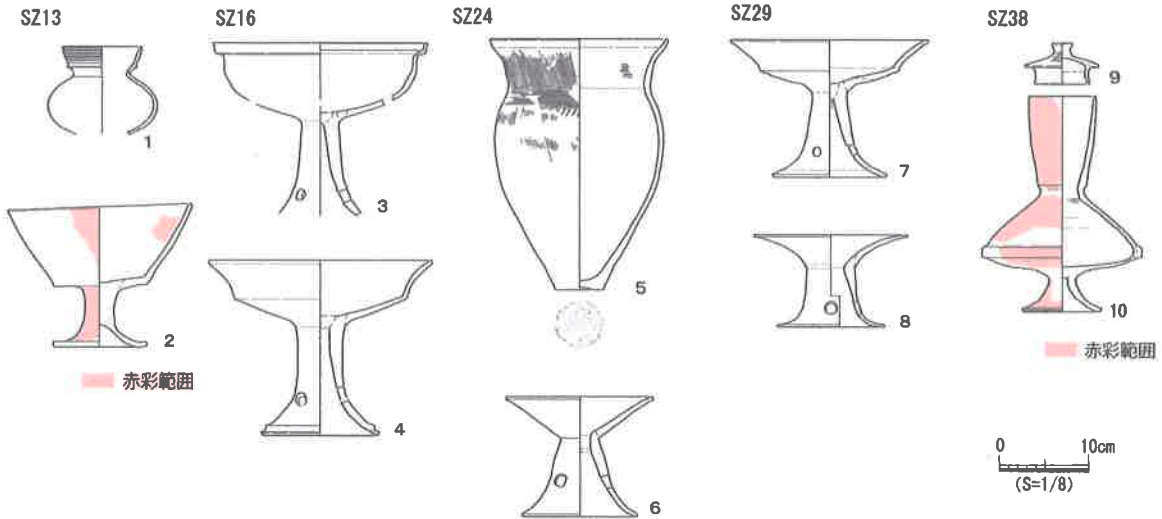
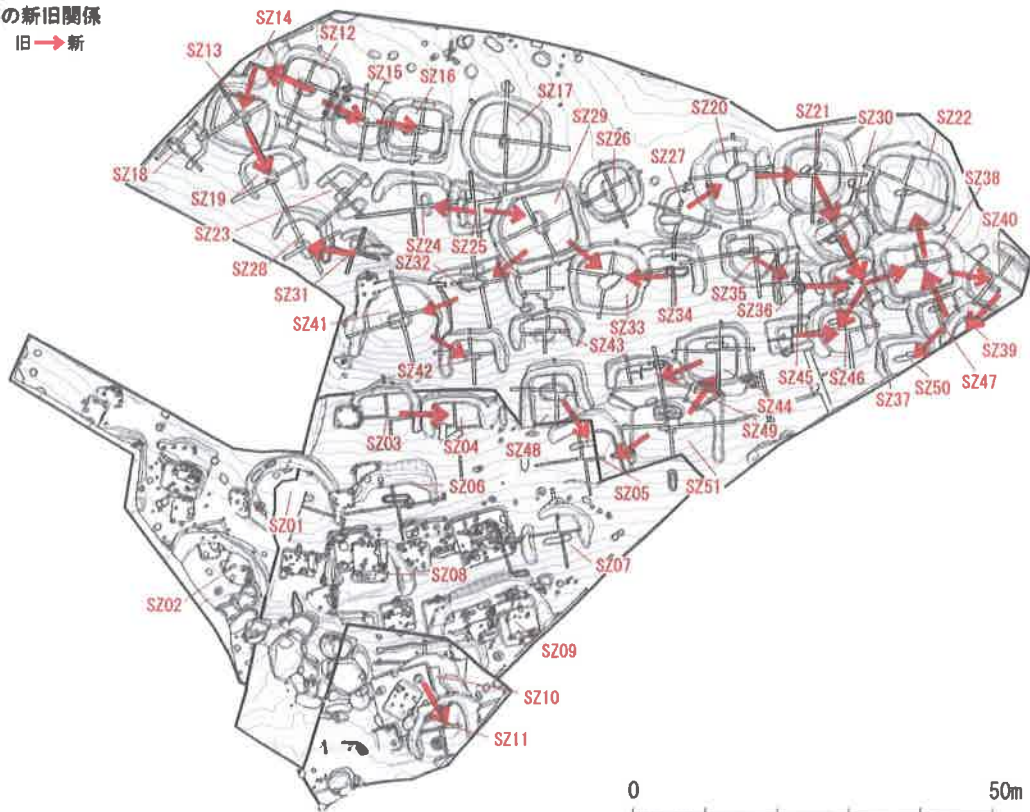


図4 主な出土土器

墳墓の新旧関係
旧 → 新



造墓の展開

■ 弥生時代後期後半以前の墳墓

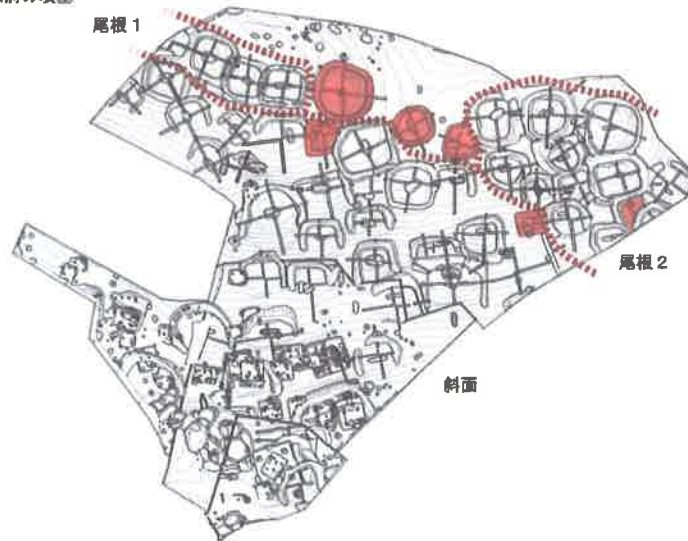


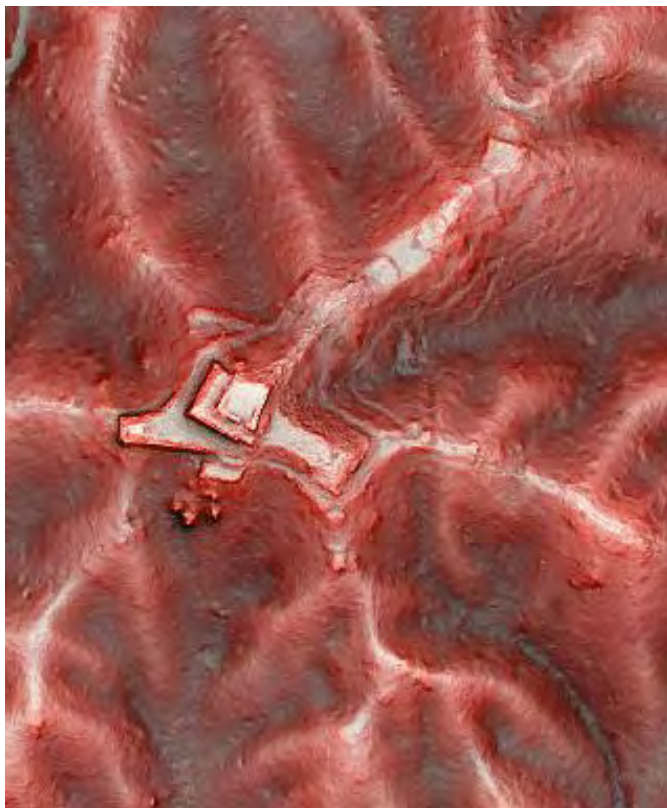
図5 墳墓の配置と造墓の変遷

〈参考文献〉

岐阜県文化財保護センター2021『上切寺尾古墳群・日焼遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第154集

県史跡「松倉城跡」の発掘調査について

高山市教育委員会事務局文化財課 押井



松倉城跡 赤色立体地図

松倉城について

松倉城は永禄（1558～1570）年間（一説には天正7（1579）年）に三木自綱が築いたとされる城です。標高856.7mの山上にあり、高山盆地と越中、郡上、信濃、美濃へむかう街道を見渡すことができます。天正13（1585）年、飛騨へ侵攻した金森長近によって落城しました。

城跡には約8mもの高さがある石垣が残り、戦国時代の飛騨を代表する山城として岐阜県の史跡に指定されています。高山市では、松倉城跡の国史跡の指定に向けた試掘確認調査を2019年から進めてきました。

赤色立体地図

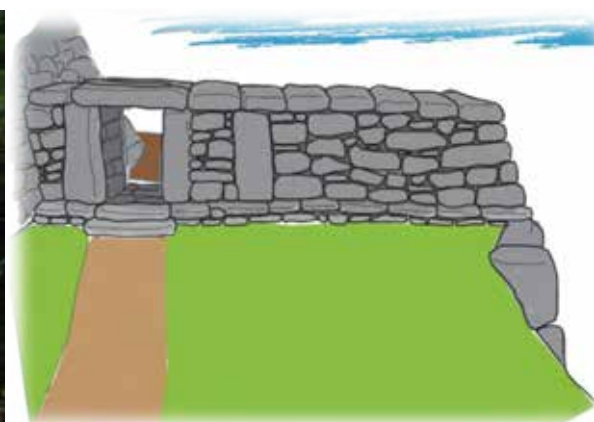
松倉城跡とその周辺の赤色立体地図を作成しました。赤色立体地図は、航空レーザ測量システムで計測した地形データを用いて、地面の凹凸を赤色の濃淡で立体的に表した地図です。草木で覆われて地表からはわからない堀切や堅堀、曲輪、通路などを確認することができます。

新発見！松倉城三ノ丸に埋門

三ノ丸の北側に曲輪を仕切る石塁を築き、その中に門を構える構造です。通路は幅、高さともに約1.5mで、長さは約2.2mです。



三ノ丸埋門現況（北側から撮影）



三ノ丸埋門推定復元図

本丸

- ・本丸内曲輪の内側も石垣がめぐらされていました。
- ・本丸の平らな面は、山頂を削り、その土を使って造成していました。
- ・礎石や柱穴は発見されませんでした。
- ・石垣の上部は壊され、外曲輪には落とされた石が積み重なっていました。
- ・崩れた石を取り除いて石垣の一段目を確認しました。



本丸調査状況（南西側から撮影）



崩落石の堆積状況



本丸内曲輪石垣

二ノ丸

- ・2組の礎石が発見されました。新旧2時期の建物があったと考えられます。
- ・瀬戸美濃陶器の皿と小壺、土師器の皿、産地不明の陶器の壺の破片が出土しました。
- ・二ノ丸の南側、北側の斜面にも石積が残っていることが分かりました。



二ノ丸礎石



二ノ丸北側斜面

出柵形虎口

- ・入口は三ノ丸と出柵の両側から石垣を崩して埋められていました。「破城」が行われたと考えられます。

三ノ丸埋門

- ・大きな石を用いて造られた門が発見されました。三ノ丸の北側を塞ぐ石塁に出入口が開けられた埋門と呼ばれる形の門です。
- ・天井に使われていたと思われる大きく平らな石は落とされ、西側は大きく崩されています。出柵形虎口と同じく



出柵形虎口 破城の状況

「破城」が行われたとみられます。



三ノ丸埋門



埋門通路の敷石



三ノ丸隅櫓 石垣と石段

三ノ丸隅櫓

- ・三ノ丸の西南隅は石垣を積んで一段高くなっており、櫓があったと考えられます。櫓台はL字形で、櫓へ上がる石段があったことが分かりました。
- ・櫓台には大量のグリ石が詰められていましたが、礎石や柱穴は見つかりませんでした。

石垣

- ・松倉城の石垣は、「松倉石」と呼ばれる濃飛流紋岩で築かれています。城の周辺の松倉石は、板状に割れているものが多く、大きな加工を施さなくても石垣の石材として使うことができる利点があったと考えられます。
- ・石垣の隅が算木積になっていることや、間詰石の使い方、石の面を揃える意識など優れた技術が感じられます。

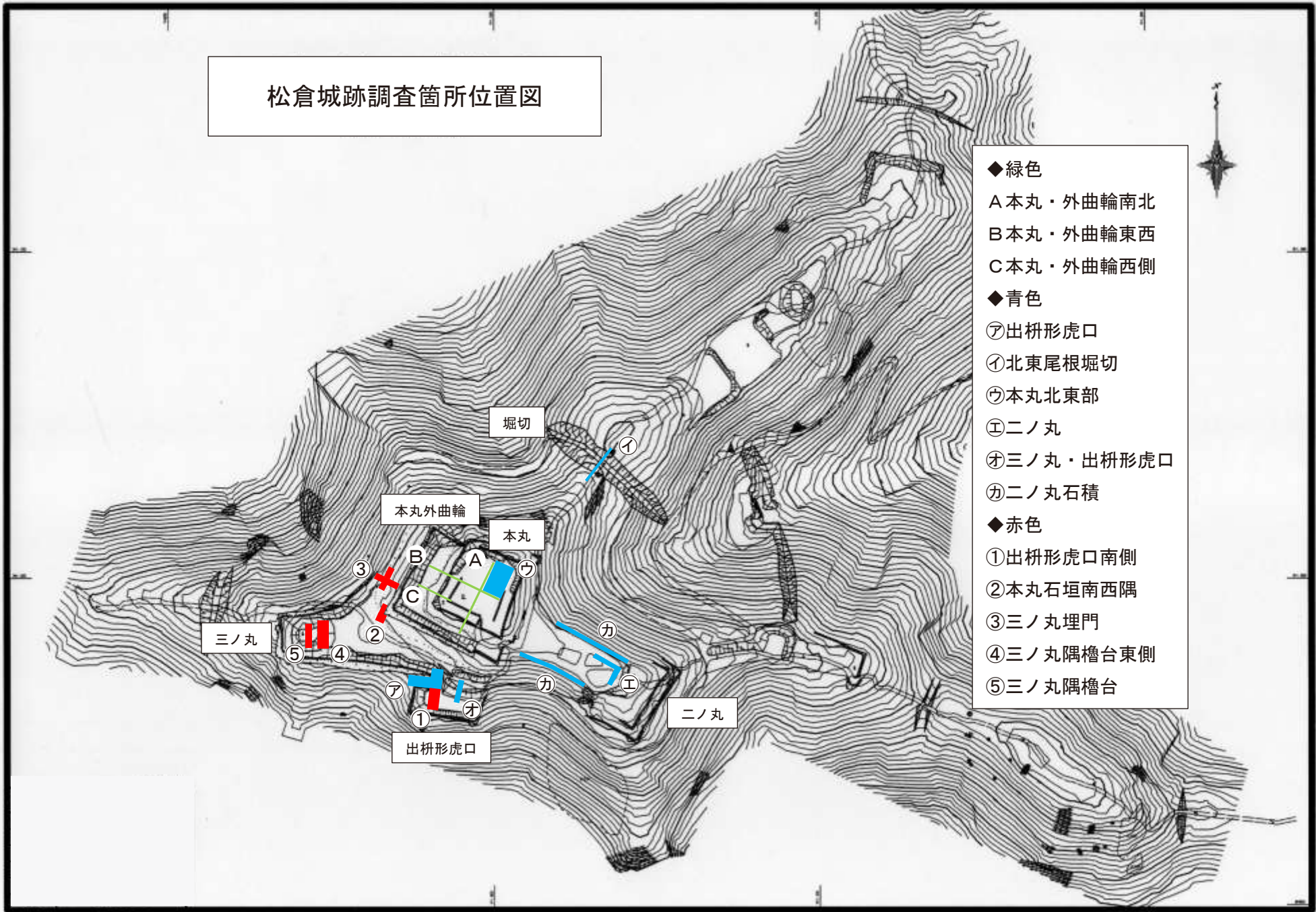


本丸外曲輪石垣 西南隅

【用語解説】

曲輪 (郭)：山を削って作り出した平らな面。形状から腰曲輪、帯曲輪などがある。
虎口：城の出入口。敵の侵入を防ぐため、直進できない入口や、周囲から攻撃できる設備などがつけられている。
櫓 (矢倉)：石垣や土塁の隅に建てられる重要な施設。見張りや射撃に使われた。
堀切・堅堀：尾根や斜面からの侵入を防ぐために掘られた溝。
土橋：堀切の一部を掘り残して造った橋状の通路。
切岸：斜面を削り、人工的に造りだした急斜面。
破城：城を壊すこと。城として使えなくするために、特に石垣や出入口などを崩す。
礎石：建物の柱を乗せるための石。
土師器：かわらけともいう。素焼きの土器で、中世では主に杯や灯明皿として使われた。
グリ石 (栗石)：石垣の内側に詰められるこぶし大の石。水はけを良くする効果がある。
算木積：石垣の隅に用いられる積み方。長方形の石の長辺と短辺が交互になるように積む。
間詰石：石垣の間に詰めて石の位置を調整するための小さい石。

松倉城跡調査箇所位置図



- ◆ 緑色
 - A 本丸・外曲輪南北
 - B 本丸・外曲輪東西
 - C 本丸・外曲輪西側
- ◆ 青色
 - ㉞ 出柵形虎口
 - ㉟ 北東尾根堀切
 - ㊱ 本丸北東部
 - ㊲ 二ノ丸
 - ㊳ 三ノ丸・出柵形虎口
 - ㊴ 二ノ丸石積
- ◆ 赤色
 - ① 出柵形虎口南側
 - ② 本丸石垣南西隅
 - ③ 三ノ丸埋門
 - ④ 三ノ丸隅櫓台東側
 - ⑤ 三ノ丸隅櫓台

事例発表Ⅲ 湯ヶ峰山頂遺跡

南山大学人文学部人類文化学科

准教授 上 峯 篤 史

下呂温泉の背後にそびえる湯ヶ峰^{ゆがみね}では、火山活動にともなって下呂石^{げろいし}とよばれるガラス質の岩石が産出しています。下呂石は約3万8000年前から石器の材料に使われていて、日本列島の人類史のはじまりを考える研究においても、下呂石が大いに注目されています。湯ヶ峰の山中では遺跡がほとんど見つかっていませんでしたが、湯ヶ峰には、下呂石を採りに来た人々の痕跡が多数残されているはずで、そのように考えた私たち南山大学^{なんざん}上峯研究室^{うへみね}は、2020年秋から湯ヶ峰に分け入り、下呂石製石器が散乱している場所を湯ヶ峰のさまざまなところ発見してきました。私たちはこれらの場所を湯ヶ峰遺跡群^{ゆがみねいせきぐん}と呼んでおり、大きく7箇所のまとまりとしてとらえています。

2021～2022年度には、湯ヶ峰の山頂近くの緩斜面で、小規模な発掘調査を実施しました。この発掘調査によって、現在の地面から湯ヶ峰の本体^{ゆがみねりゅうもん}（湯ヶ峰流紋岩）までに、どのような地層がどういう順番で堆積しているのかが明らかになりました。どのような経緯で、湯ヶ峰が現在のよな山になったのかが、少しだけわかってきたのです。そしてその地層から、下呂石製の遺物が多数出土し、この場所が間違いなく遺跡であることが確認できました。この遺跡は「湯ヶ峰山頂遺跡^{ゆがみねさんていいせき}」と呼ばれることになりました。湯ヶ峰山頂遺跡では、多数の石片とともに、石槍^{いしやり}の製作失敗品と考えられるものが出土し、太古の石槍製作址が付近にあったことがうかがえます。遺跡の年代は現在調査中ですが、約7000年前よりは古く、約2万年前まで遡る可能性があると考えています。旧石器時代^{きゅうせきじだい}の終わりから縄文時代^{じょうもんじだい}のはじめ頃にあたります。

私たちにとって湯ヶ峰は、文字がない時代の人間活動を知るための研究対象であるとともに、学びの場でもあります。コロナ禍にあつて、学生らの学習や研究活動は、湯ヶ峰を中心に深められました。発掘調査期間中、湯ヶ峰には多数の研究者が訪れ、新たな知的好奇心がいくつも芽ばえました。2022年度からは下呂市^{げろい}焼石地区の皆さまにご支援頂き、遺跡や考古学が地域と共にあることを実感しています。

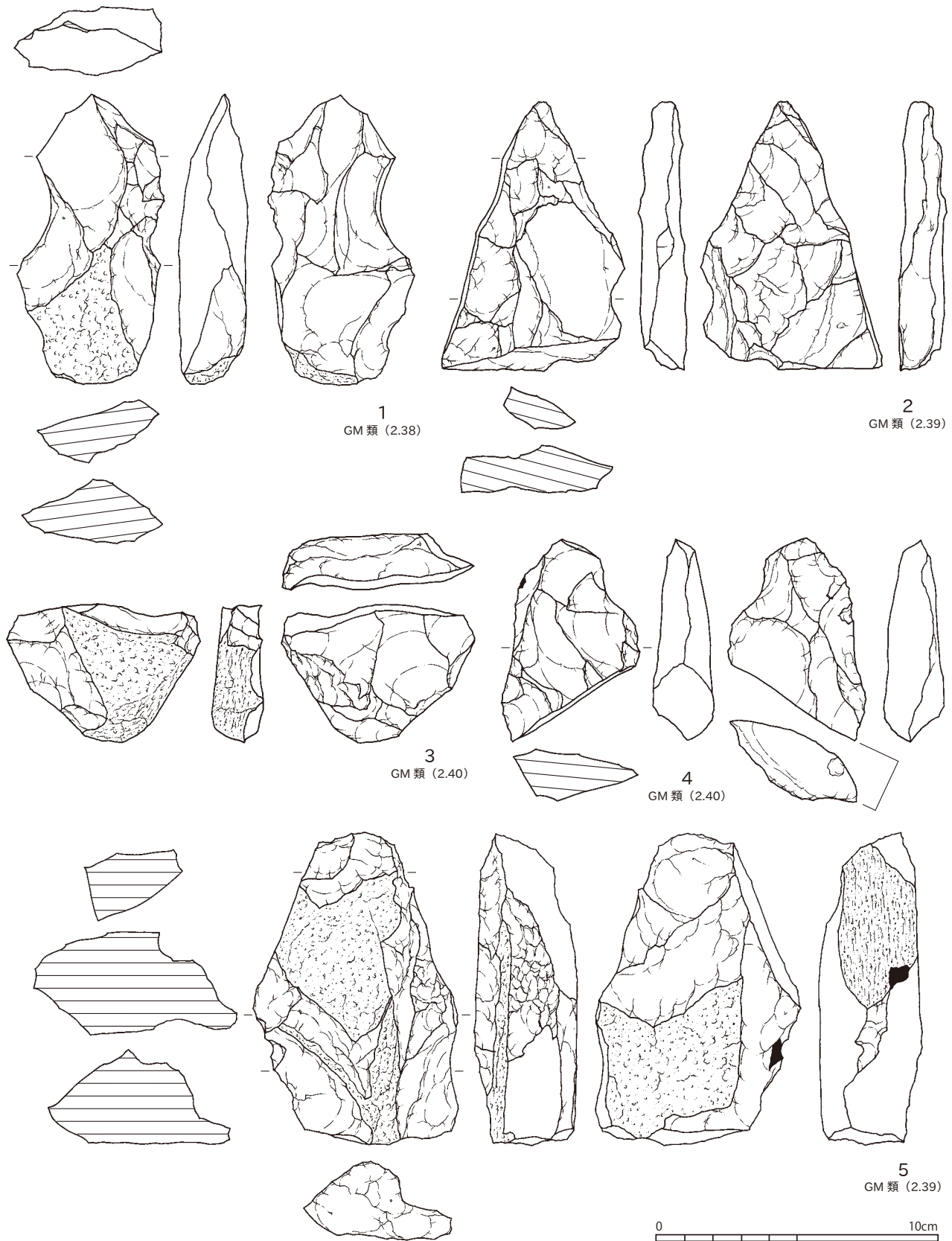


図3 湯ヶ峰山頂遺跡で発見された「石槍」関係資料（すべて下呂石製）

上峯篤史ほか「下呂石原産地「湯ヶ峰」における人類活動痕跡の探索」『日本考古学』56号（2023年）より転載

私の クラス

My
Class



上峯 篤史(うえみね あつし)

人文学部 人類文化学科 准教授

専攻分野: 考古学、文化財科学、先史学

研究テーマ: 東アジア先史時代における人類交替劇の文化的研究

主な担当科目: 考古学実習A・B、考古学入門、考古学A

遺跡「で」学ぶ

考古学は、地中に眠る石器や土器等の様々な遺物、時には土そのものを調べて、過去の人類が備えていた文化や行動を明らかにします。本学では上峯研究室の課外活動や「考古学実習」の授業として、遺跡発掘調査に取り組んでいます。学年も経験も興味関心も様々な学生が集い、研究の最先端でもある発掘現場で学んでいます。

「考古学は地域に勇気を与える」といいます。考古学が地域の新たな価値を掘り起こし、その活性化に貢献するのです。2022年夏に岐阜県下呂市で実施した発掘調査は、石器の原料「下呂石」を取りに来た縄文時代人の姿を明らかにし、学界や地元の注目を集めました。特に地元の皆様とのつながりは温かく、まるで里帰りしてきた孫のように扱っていただきました。毎日、

誰かしらが調査の進捗や私たちの体調を気にしてくださり、地元の川の幸・山の幸も頂戴しました。発掘現場を訪ねる父娘もいれば、方々から「下呂市を調べてくれてありがとう」の声も聞かれました。

地域と一体となった学びの環境は、最高の教室です。自分の勉強が、誰かの関心を惹いたり、感謝されることさえある。自分の勉強は、自分だけで成り立っているのではなく、誰かの協力のもとに成り立っている。学生らは、本や教室の外に広がる世界を垣間見ることができます。足元には、少し遠慮しながらも誰かの力を借りて、自分が得たものを誰かに向けて発信していく、開かれた情報生産者としての道が見えていることでしょう。



『南山大学広報誌 NANZAN BULLETIN』 vol. 222 (2022年) より転載

令和4年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査実施一覧

通番	所在地	遺跡名	時代	種類	調査主体
1	各務原市	鵜沼古市場遺跡	奈良～中世	集落跡	各務原市教育委員会
2	可児市	柿田西遺跡B地点	弥生～中世	集落跡	可児市文化スポーツ部文化財課
3	本巣市	船木山古墳群	古墳	古墳	本巣市教育委員会
4	養老町	白石道遺跡	奈良	集落跡	岐阜県文化財保護センター
5	高山市	松本上野遺跡	縄文	集落跡	岐阜県文化財保護センター
6	可児市	美濃金山城跡	中世	城館跡	可児市文化スポーツ部文化財課
7	関市	下大洞1号古墳・下大洞2号古墳	古墳	古墳	関市文化財保護センター
8	下呂市	湯ヶ峰山頂遺跡	旧石器	散布地	南山大学
9	可児市	柿田西遺跡A地点	弥生～中世	集落跡	可児市文化スポーツ部文化財課
10	土岐市	妻木平遺跡	古墳～近世	集落跡	土岐市教育委員会
11	大野町	野古墳群	古墳	古墳	大野町教育委員会
12	岐阜市	芥見町屋遺跡	弥生～中世	集落跡	岐阜県文化財保護センター
13	各務原市	鵜沼古市場遺跡F地区	中世、近世	集落跡	各務原市教育委員会
14	大野町	上磯古墳群南山古墳	古墳	古墳	大野町教育委員会
15	関市	大杉西遺跡	古代、中世	集落跡	関市文化財保護センター
16	美濃加茂市	牧野小山遺跡	古墳～中世	集落跡	美濃加茂市市民協働部文化振興課

メ モ



©岐阜県